まえがき

本書は、一橋大学における一年生向けの必修英語科目で使用される、ライティングのためのガイドブック・教科書として編纂されました。

昨今の日本の英語教育に関しては、「コミュニケーション」の重要性が盛んに強調されています。その場合に「コミュニケーション」という言葉が指すのは、なぜか「オーラル・コミュニケーション」のことのようです。従来的には、日本の英語教育においては口頭のコミュニケーション技術の訓練の比重が低かったのは確かで、近年の取り組みによって、大学に入学する学生たちの聞き取り能力や口頭による発信の能力が相対的に高まってきたことは、英語教授の現場にいる本書の執筆・編集者たちも実感しているところです。

しかしその一方で、「コミュニケーション」のより広い意味、本来の意味が忘れられようとしているという危惧もあります。つまり、読むことや書くことは「コミュニケーション」とは見なされなくなり、下手をすると読み書きの能力と聞き話す能力とは無関係のものと見なされ、それどころか読むことと書くことを教えるのは害悪でさえあるというような転倒した風潮が生まれつつあるように感じられるのです。

実際、大学に入学してくる学生たちの文法能力や語彙力は、目に見えて低下してきています。これはおそらく、「口頭で発信をするためには文法の正確さは犠牲にし、語彙もできるだけ簡単なものに制限をした方がよい」という、ある意味では理解のできる事情によるものではないでしょうか。その結果、授業のレポートなどで英語を書く際にも、動詞の一致や時制の選択もままならず、また語彙も稚拙なものを繰り返し使うような傾向が見られるようになりました。

一橋大学英語科では、聞くこと・話すことと同様に読むこと・書くことも「コミュニケーション」の重要な一部であると考え、またさらには読み書き能力を高めることが聞き・話す能力の基礎となるという、当然とも思えるけれども忘れ去られつつある原理を再確認しながら、英語カリキュラムを展開しています。

本書はそのような理念に基づくカリキュラムの中で、「書くこと」一般ではなく、大学における「アカデミック・ライティング」の基礎を教授する際のガイドブックとして編纂されたものです。詳しくはこのあとの「1.0 アカデミック・ライティングの文化」に譲りますが、アカデミック・ライティングの基本を学

ぶことは、書くことによって何かを伝達・主張することの基礎として非常に重要であるとはいえ、その基本は高校までの英語教育においては教えられておらず、大学の基本カリキュラムに組み込む必要があります。

本書の原型となったのは、2011年に一橋大学英語科が非売品のかたちで発行し、それ以来授業で使用してきた『In Your Own Words 英語アカデミック・ライティングの基礎』です。この教科書を授業で使ってきた経験から、このような内容のガイドブックは広く他大学においても英語ライティング教育でのニーズがあるだろうと考え、一橋大学のみで通用する内容を削除し、サンプル文の差し替え・追加などの再編集をしました。

原型となった教科書の大部分は、一橋大学の川本玲子が執筆しました。再編集にあたっては同じく一橋大学の河野真太郎、越智博美、Christopher Sullivan, Greg Dvorak が中心となって作業を行い、最終的には一橋大学英語科の教員全員によって校閲作業を行いました。